

氏 名	芦村 龍一
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第625号
学位授与年月日	令和5年 3月17日
審 査 委 員	主査 教授 大野 智
	副査 教授 紫藤 治
	副査 教授 一瀬 邦弘

論文審査の結果の要旨

食塩感受性は、食塩摂取量に対する血圧の反応性によって特徴づけられる。慢性的な重度の飲酒が食塩感受性を増強した報告はあるが、一般住民における飲酒が食塩感受性に影響を与えるか明らかではない。また、食塩摂取量は、慢性腎臓病の初期初見であるアルブミン尿に影響する重要な要因である。飲酒もアルブミン尿の発症要因の一つであるが、食塩摂取量とアルブミン尿の関係に飲酒が影響するか明らかではない。申請者は、製薬会社職員507人を対象に、2年間の健康診断結果を用いて、飲酒頻度が食塩摂取量と血圧、食塩摂取量とアルブミン尿の関係を修飾するか1年間の観察研究を行った。主要暴露因子は、2017年と2018年の食塩摂取量の差で、飲酒頻度は質問紙法により3群に分類した。アウトカムは、2017年と2018年の血圧の差およびアルブミン尿の差とした。多変量線形回帰モデルの結果、食塩摂取量 1 g/日増加あたり、収縮期血圧が「ほとんど飲まない」群で0.19 mmHg、「機会があれば飲む」群で0.84 mmHg、「ほぼ毎日飲む」群で1.78 mmHg上昇し、飲酒頻度依存性の関係を認めた。また、アルブミン尿も同様に、食塩摂取量 1 g/日増加あたり、「ほとんど飲まない」群で14%、「機会があれば飲む」群で17%、「ほぼ毎日飲む」群で22%増加し、飲酒頻度依存性の関係を認めた。本研究は、飲酒頻度による食塩感受性の増強、食塩摂取によるアルブミン尿の増大を明らかにし、飲酒者は血圧低下やアルブミン尿減少を目的とした食塩制限が、特に有効な集団であることを提唱する重要な研究である。